

13
3237
4



門 13
3237
4

善知安方忠義傳前編卷之三上冊

緑亀館文庫

江戸 山東傳著

召取川

第八條

大天慶小東國の猛將將門亡び西海の賊首純友打とくつり以來

世の中無爲に屬し万民や多く安堵の多かりけり頃又東西の

國より飛脚到來して去る頃より群盜蜂起し官物私賦の差別

り奪取の妨げなきとも國司の制よ及びどちや御勢下され

し誅戮の人民の煩これこそさうべいと日くみ註進ひまわりの

けは諸卿貪義ありて在京の武士も命を征討あふとて即將帥の

差量を撰とす其人多く左衛門佐兼武藏守源滿政左衛門

尉平惟時周防前司源頼親冷泉院判官代源頼信をそえんとす

善知安方忠義傳

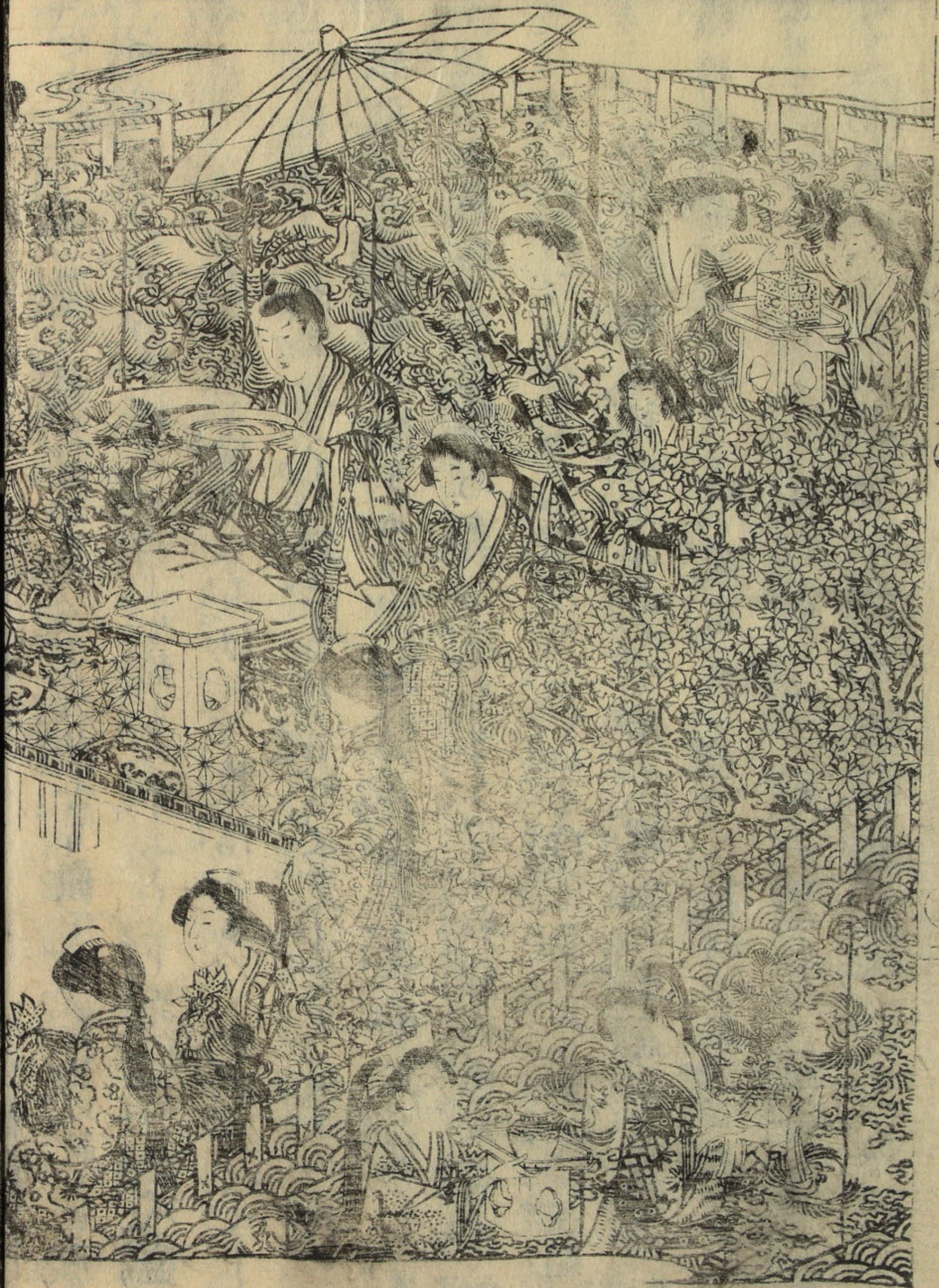
昭和十年七月九日購求

けられ。光朝臣とさたならしく。肥前の大守小補せられ。九州小下りおせし
 られた。此人のこそ宜旨をかりうられけれ。其うちも頼信ハ関東小
 下りて衆賊をまづむべきは命ぜられきり。柳頼信ハ多田の満仲のこ
 男ふし。則頼光の舎弟なり。武勇文武父兄小おとつる大將也。
 いさうも軍勢不息し。いづれゆゑもや。近曾俄小心かり。狂酒
 耽り。驕奢小長ト。佚遊宴樂小のこあじふし。けさ。錦襦頰緋
 かざり。翠黛紅粉化粧ひた。養女。床を争ひ。昔酒珍膳座中
 みち。綾羅の袖ひるがへ。頻鳥の音。和げ。郢曲謳歌。日夜
 なく。いれが鳥小春の日も長さをむく。秋の夜も短し。ところ
 けり。されゆゑも。此度おとつる宜旨をうらうらみ。都々離て遠
 東小下れを愁ひ。重病と披露して。西山の下館小引籠。朝廷に

きこえをも辱らむ。親兄のおとつる所をも顧み。家臣の諫をも用
 一向。娼酒。狐むこがりけり。此時も弥生の半。下館の搦。今狐盛
 咲乱。海をわさむ。風情ひりけれ。頼信さる。遊を仕。今
 今。日。兼。飼。お。た。た。雞。も。合。せ。て。庭。上。の。花。の。下
 小。緋。緞。子。の。幔。幕。を。ひ。き。め。じ。た。れ。ば。片。と。夏。風。小。散。満。炎
 を。揚。る。小。異。あ。と。幕。の。裏。小。床。を。ま。う。け。紅。緑。の。氈。展。布。豹
 虎。の。皮。を。か。け。な。れ。ば。又。小。眼。み。て。し。心。も。空。ま。り。ぬ。頼。信。ハ。正。面。小
 ぼ。う。け。た。れ。錦。襦。の。袖。の。上。み。あ。ぐ。居。る。螺。鈿。の。服。息。小。文。小。靠。紅
 羅。の。傘。蓋。が。さ。か。け。せ。龍。右。の。花。小。粧。ひ。う。れ。美。女。あ。さ。お。い
 ち。あ。て。か。り。小。酌。を。さ。し。大。盃。を。傾。花。を。賞。し。關。雞。の。支。度
 ち。の。小。待。ぬ。臺。盤。所。より。持。運。種。の。献。盃。様。の。美。物。か。ぞ。へ

一筆知卷之三

源頼信
酒色を
むさわり
驕奢小
長ぞ



尽とべらもあふぞ。程あり支度そのひと披露し句薫蘭を熨し。
粧紅粉尽しとる。美女二十人。色々の花鳥を織尽し。深狂しこれ
袿衣を。一様みえがらり。箇、雞を抱くられあの中軍をふみひと
つ。まゝめきつりて練出。爛熳とほ櫻のゆきに立ちびる。姿いづれを
花と辨どがし。實是蜀山阿房の六宮ふ三千人の嬋娟ふあそひ
邯鄲旅亭の一炊ふ五十年の歡樂をまへめしも。かくやとそふごり
なり。扱十番とさめて次第は雞合也。其さぬいふあれば。

逆もみゆりく風ふより。尾波をたてし沙をちりし。蒲さあし。羽
たれ怒勢あれば猛志あり。翅ふとめくられ薫物。韻郁とく
あふりふあふり。距ふかざりたれ黄金曜とくく日映と。或も躑
或ハ躑。地を肥く俯伏。或ハ採く飛舉也。威风益猛。氣勢轉盛

なり。冠はなれく曹とし。翅とあさく甲と。紫角と以く劍とし
距と以く戦とし。天の時と得く進むあれば地の利と失ひく退く
あり。漢拊雄威の盛るは不異あふと。齊兵戰膽の寒し似たり。斬
小雌雄を決し。勝劣はくくつけあふ。毛ハ飛く春風ふ花と散と
と疑ひ。血の流とく秋水は紅葉を浮めたるうとあやすらね。
頼信はこれあふとく大に喜び。数盃を傾く深く爛酔し。あふく身をも
催しける。爰ふ又頼信の家臣ふ。藤六左近輔相といふ者あり。よあは者
ありけるがゆゑありて零落し。權民間小居くれば。多田の満仲公彼
器量をさうしめ。招きいへく禄をふけられあふ。藤六其情は感し
小家臣の列まあふびぬ。其後満仲公のとうひとて。頼信の家臣あ
せられけり。此人曾く文武の道に通ざるのこなく。和歌の達者あり。

前年將門の首を搦らるる。眼をぐくかれど。刺かの首よましく。笑ひて。軀あふ。今一度合戦と。そのをこよむ。時小藤六が。つら。

將門の采噓よりぞ。まじられけれ。俵藤太が。謀み。

と。口ぞ。みけ。忽眼。み。た。れ。と。云。け。ふ。さ。さ。此藤六。頃日。主君。

頼信の。身持。あ。し。と。み。嘆。く。あ。ぐ。諫。う。し。も。り。ひ。ふ。れ。あ。は。つ。く。

諫。を。一。と。折。を。う。か。ひ。居。る。ふ。此日。雞合の。催。あり。と。せ。よ。た。折。と。ひ。

急。と。下。館。小。立。と。え。侍。女。等。小。案。内。と。せ。く。奥。庭。小。到。り。頼。信。の。面。前。

小。出。あ。ら。り。見。ま。へ。し。つ。し。る。ふ。こ。の。け。か。ら。げ。れ。つ。催。し。哉。足。す。と。

度。く。の。諫。を。し。り。ら。ひ。ま。し。と。い。ふ。も。今。日。は。よ。く。し。つ。さ。さ。み。は。れ。り。

君。い。ま。も。若。年。と。い。ふ。此。度。群。賊。追。討。の。お。り。た。宣。旨。が。つ。り。ま。の。

り。つ。武。勇。の。秀。も。ふ。あ。と。い。ひ。あ。ら。り。畢。竟。つ。父。君。伯。父。の。殿。は。兄。

君。の。つ。武。德。の。い。み。だ。た。御。餘。光。なり。然。り。ま。か。く。虚。病。が。か。へ。く。東。國。の。

つ。下。こ。の。遅。く。あ。ら。み。の。み。あ。ら。り。女。原。を。集。め。く。放。佚。無。慙。の。つ。行。跡。

朝廷。が。か。ら。り。め。あ。の。罪。足。り。大。さ。あ。ら。り。若。此。車。上。み。り。れ。と。こ。え。

あ。げ。其。罪。つ。身。の。み。り。御。一。族。の。つ。う。あ。も。か。れ。る。と。殊。更。東。國。を。

朝。敵。將。門。の。餘。類。が。つ。住。よ。り。先。達。と。所。と。高。札。立。立。賞。銀。が。

出。し。く。探。索。あ。ら。り。い。ふ。も。と。か。其。在。所。を。れ。ど。ら。け。た。ぬ。り。た。ら。

度。の。群。賊。も。必。定。其。族。あ。ら。り。と。それ。が。か。く。安。間。と。い。く。暮。し。た。ま。ふ。

時。節。あ。ら。り。ん。一。刻。も。と。や。つ。出。陳。が。促。し。あ。ら。り。若。年。と。は。

や。し。た。ら。の。ら。つ。辨。な。れ。つ。心。う。ま。と。何。の。憚。れ。所。も。あ。く。異。見。残。と。を。

し。し。け。と。べ。頼。信。大。み。氣。色。が。損。し。腹。息。を。押。の。け。く。進。こ。出。や。を。と。

藤。六。よ。汝。と。れ。し。く。諫。れ。度。く。と。か。く。我。父。兄。の。光。り。が。か。り。て。身。を。と。

ように専ふいひこ。嘲し辱れ糸。若年と侮とのるあぶし。譜代古
 老の者さし口尻ささくいとけふ。汝一人めえん出さく人もあげなるし糸
 奇怪ありありあり。汝一旦民間お下り餓死んとせしを。我父の情よりて
 再武士あさりあげれしを。や忘れし人かしく過言いふ。今一言お
 およが方お其座へたせしと。声あつてつひつ。臂をとり。居丈たう
 あり。そとこあみけしと。左右おあみ居るに美女等。手お汗が握り
 一言をいふりのあり。座中ひそとあつりけし。藤六をおさけしはも
 あく。なほ小膝おさめ。臂をおしりりりり。はても情なき心
 底る。是等のおとら理を。御辨かき君おさるあり。かあふと
 天驚のえ入られし人。今のはひいあつ。某薄命ふしと世に零
 落しとれぬ。父君の法情ふりり。再人がまじり交りてをさると生

のりの世あふ忘れしとらん。其洪恩をおさるごころ。かく人おぬえん出
 御諫よりしとられ。抑鬪雞と。大内の御遊みり。武家子たきとて
 あそぶるに又おあつ。傳聞唐の玄宗皇帝。楊貴妃を愛し。驪
 山の花清宮おあり。嬉酒お耽り。自然仁政撫育の行跡乱れ
 ぎ。揚國忠雞を献げし。一向鬪雞が好し。小兒五百人お撰り
 治雞坊といふ所を建て雞を養ひし。時の人れ語ふ。兒を生ハ
 文字お識をりらひされ。鬪雞。走馬。讀書お勝しりり。上は
 朝し。果し。安禄山が為小世お乱せり。或る魯曾の昭公の時。
 季平子。邵昭伯と。雞を合も。季氏お雞の羽お芥子を播りて。邵氏の
 雞の目おかけさせし。邵氏は。距を金おさ。踏む。とれり互お怒をひき
 出さく。大に遺恨とありし。夏。春秋お明あり。或は淮南子よ。禍の從



藤六左近
頼信を
いさめ
手打
し

善知卷之三

梢の花を散し。頼信のまうらふ冷氣あみとちれとおぼへし。いづい
 よりう集りけん。黄なる蝶くあまの群花。えましく充滿し或ハ塊り
 或ハ碎け。花のま飛牙あり。四面八方お散乱し。そのまはたかひをあたふ
 似たり。頼信らの形勢をあまごえさ。あま怪さるる。太れ兼平年間
 常陸下野ふかくのごとく怪異あり。将門の一乱起りたる例あり
 正是兵革の兆なり。東鑑 叔と藤六がいひつごとく。将門の餘類東
 國ふかれ住さ。世次乱んと企ふ疑あり。恠むしりとひひつ
 血刀をさのげさそく。手次さすぬと頭次たどく。権惘然とれ跡あり。い
 忽迷雲えれく胸月がやた。本心お立ちうりく。夢の醒さるおとく。い
 おぶへ。おのが手おつきたる血と。藤六が死骸おえく大お驚と。かこ
 けらふ子細を尋ね。叔ハ我かれを手おかけし。さるるもおむらりた。

不便の事をおましたりとも。一向後悔せし時。かの蝶を尽く空中に
 去さる。是より自己志願あくなり。女原をありぞけ。俄お病全快の
 よしを披き。東國出陳の支度をぞいとがとけ。のらく。此時れ
 子細を尋ね。頼信俄お行跡乱したる。かの内芝仙が蝦蟇の妖
 術の所為あり。さばぐお心を狂りせ。忠臣を殺し。やと下。恨み
 ひきいごさせ。つひお自滅させんとさる。藤六が忠義の魂魄蝶
 と化して。本心お立ちかへせけれありとぞ。誠是たぐひおれある忠臣也
 叔又藤六が妻を綱手といひけり。夫主君の手打おありし。とぞ
 大お悲し。頼信本心お立ちかへり。とぞ露あふ。諫言をあらひ。おのど
 夫が手討おし。うらむどの不道人あり。我輩をも捕り。四討し。あま
 づんハ必定あり。あうとぞ誰ありて。夫の跡をさあ。おぞさ。いづい

今宵のうらみ出奔し。いづれもかかれず子ごも等をおひ立。再家成
おととふ志うどと心成はごめ。今年十六才ありけれ娘唐衣が手とひこ
いそと孩児ありけれ男子成懐あり。家賊をよけてその夜のうらみづく
ともなく逃失けり。誠お衣のありさぬあり。頼信と藤六を手ふかけられ
こころ益悔之。せめての亡骸をわんごはふさうおせんし。妻子成けり
出奔し家小ありととささくれれば。扱を我怒をおそれる事あり
逃かれられり。かきくも不便なりと。その跡をたづねしめ藤六
が死骸成ありあつて葬らしめおはし布施を出し。併事成營させ
已小発足の支度とのひまをば。吉日成えひく東國みを下り
まされ。

○安小將門の采噓よりどさくせの狂歌の藤六九近がはごころみ

あるより。平治物語ふつるの

○宇治拾遺物語の昔よりあみごの誓あつめあつるのどさくさ

とどまるといふ狂歌もあるが藤六あり

○拾遺集の藤原輔相とあはれ藤六あり。詠せられ歌三十六首載

たり。みる俳諧体の歌あり

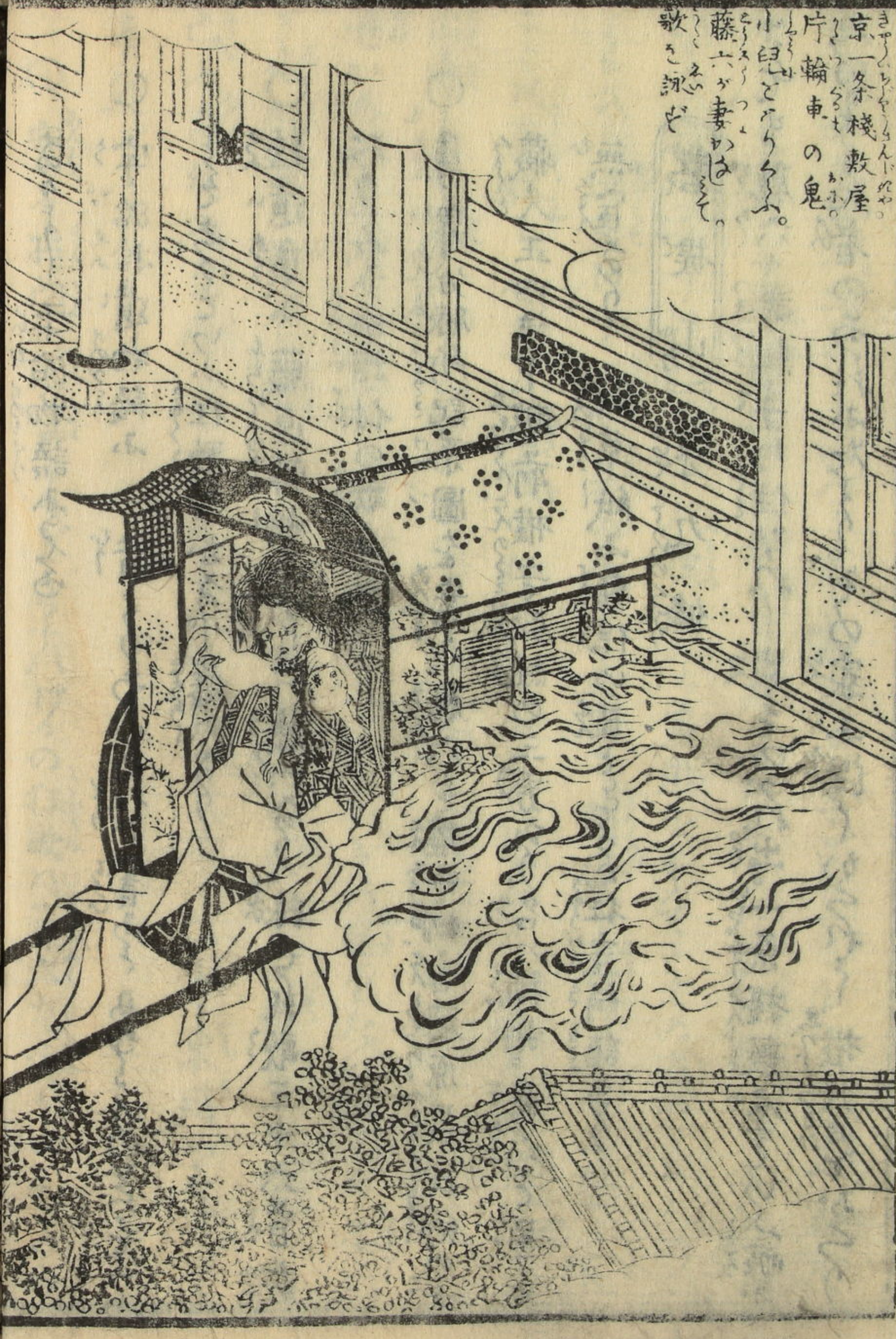
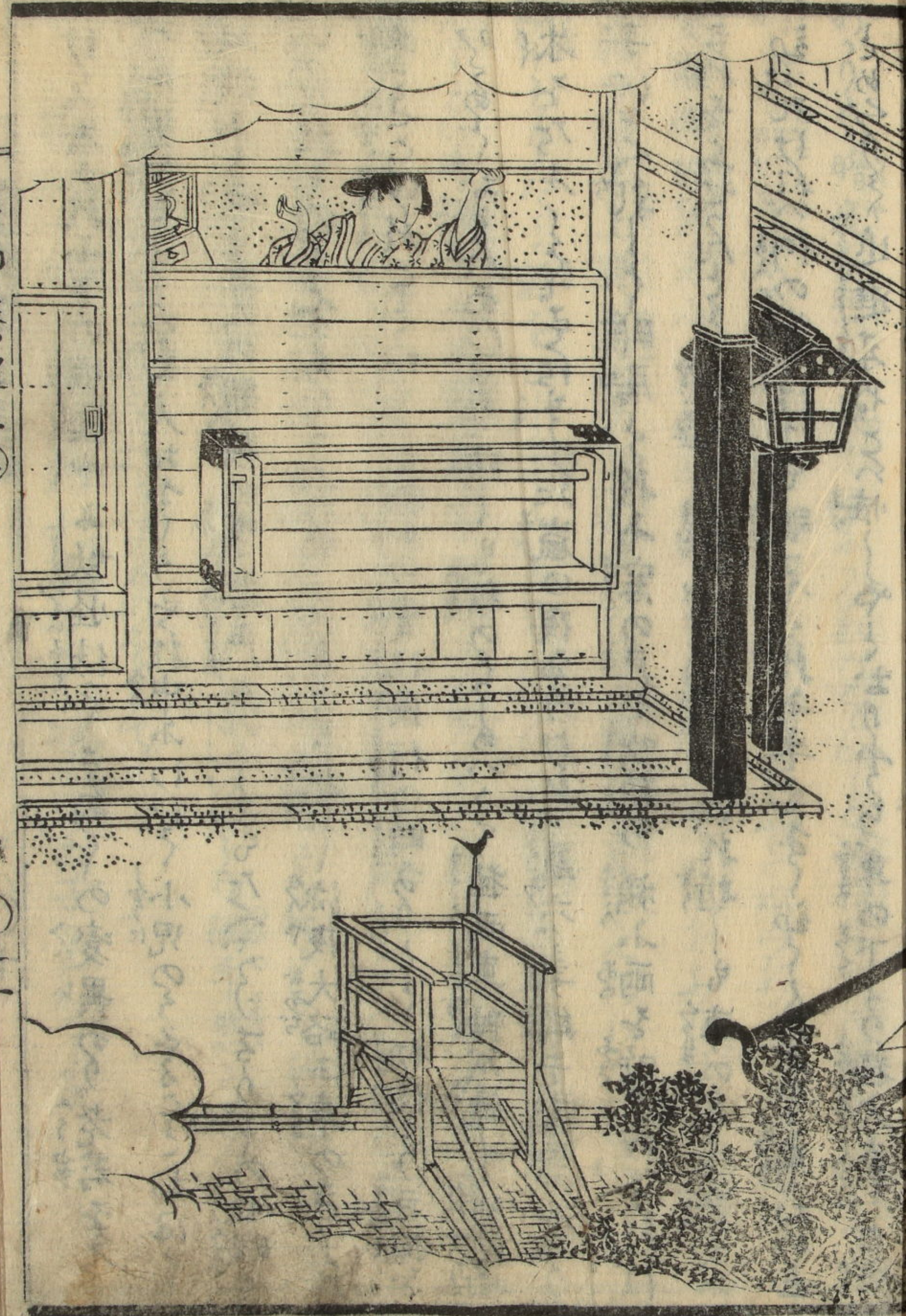
○尊卑分脈所記系圖を案ふ藤六を權中納言藤原長良郷の子

藏人正四位下越前權守弘經の三男あり。名の輔相。藤六と号す。

無官あり。此草紙小頼信の臣ととる。狂言綺語あり

盤提山 第九條

さても藤六が妻細平の住かれ家をのぐれ出。一条棧敷屋といふ所
たのそし者のおれなより。その家小深くかれ。権月日とおろり



京一条棧敷屋
 片輪車の鬼
 小唄とてうらふ
 藤六が妻はは
 歌を詠む

事知
 卷之三
 三十一

けり。あつれふ子の頃浴中み妖怪住こ。さあくの寝異あり。老若をえ
 ついで男女とさうらふ。人おやくうされ中あひけく小児のうさることおほく
 此彼あうせう人の親族の嘆悲声あつらふもたへうする。その妖怪を
 いっせれそのえとめたる人あひげとも。折く流夜大路ふ車のきりれ
 音とことゆれことなり。これかの變化夜行の時ありとく初夜より戸福を
 かめくおそれあひり。頃も秋のそらあつこ。猛雨車軸流し。烈風樹
 木をたふさくさばまじら嵐の夜ありけれ。藤六が妻細手東西のみり
 子にそく乳く眠居るお。窓の戸を吹放ち。頻ふ雨を吹こみされば
 これをふせんとも起上り。窓の下ふ立よりけ折しも車のさうる音大ふ
 むたければ。何の心もはうご。覗くお。牛もまぐむく人もあさ車。おのこ
 とめらう。近進取ぬ。さ怖くやとおりから。車の下より猛火炎と燃

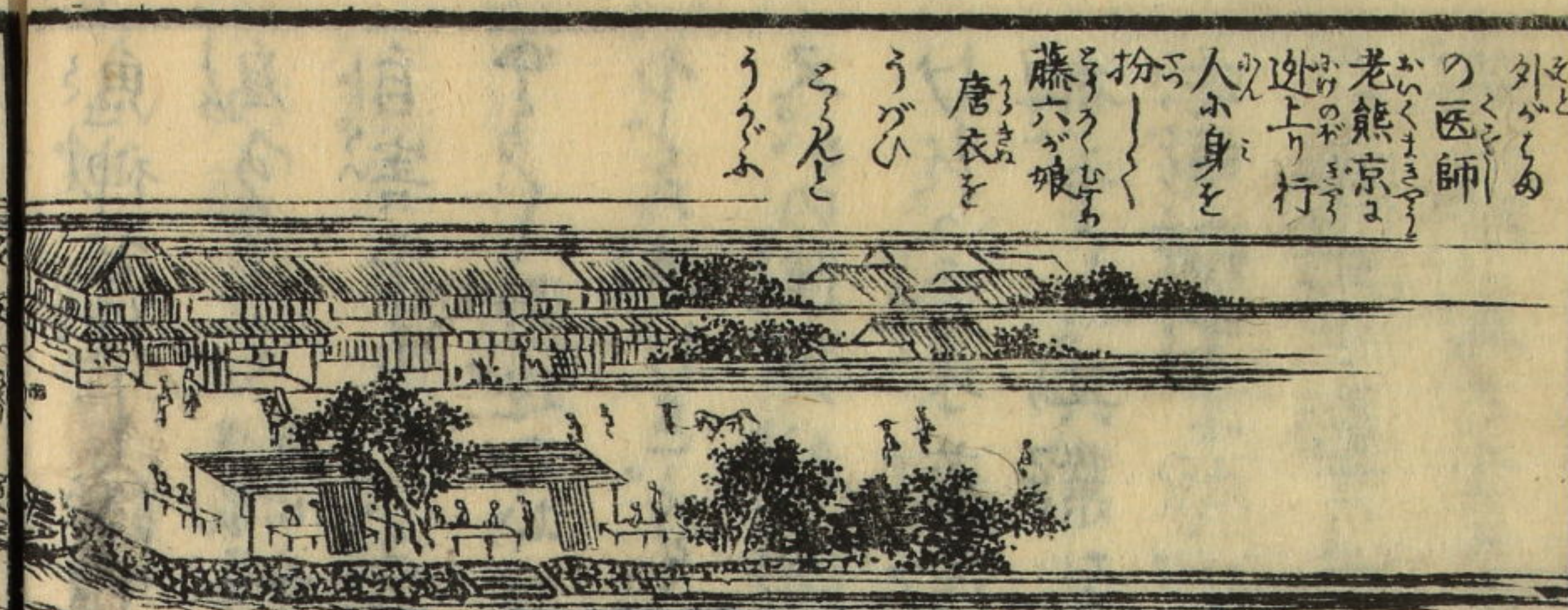
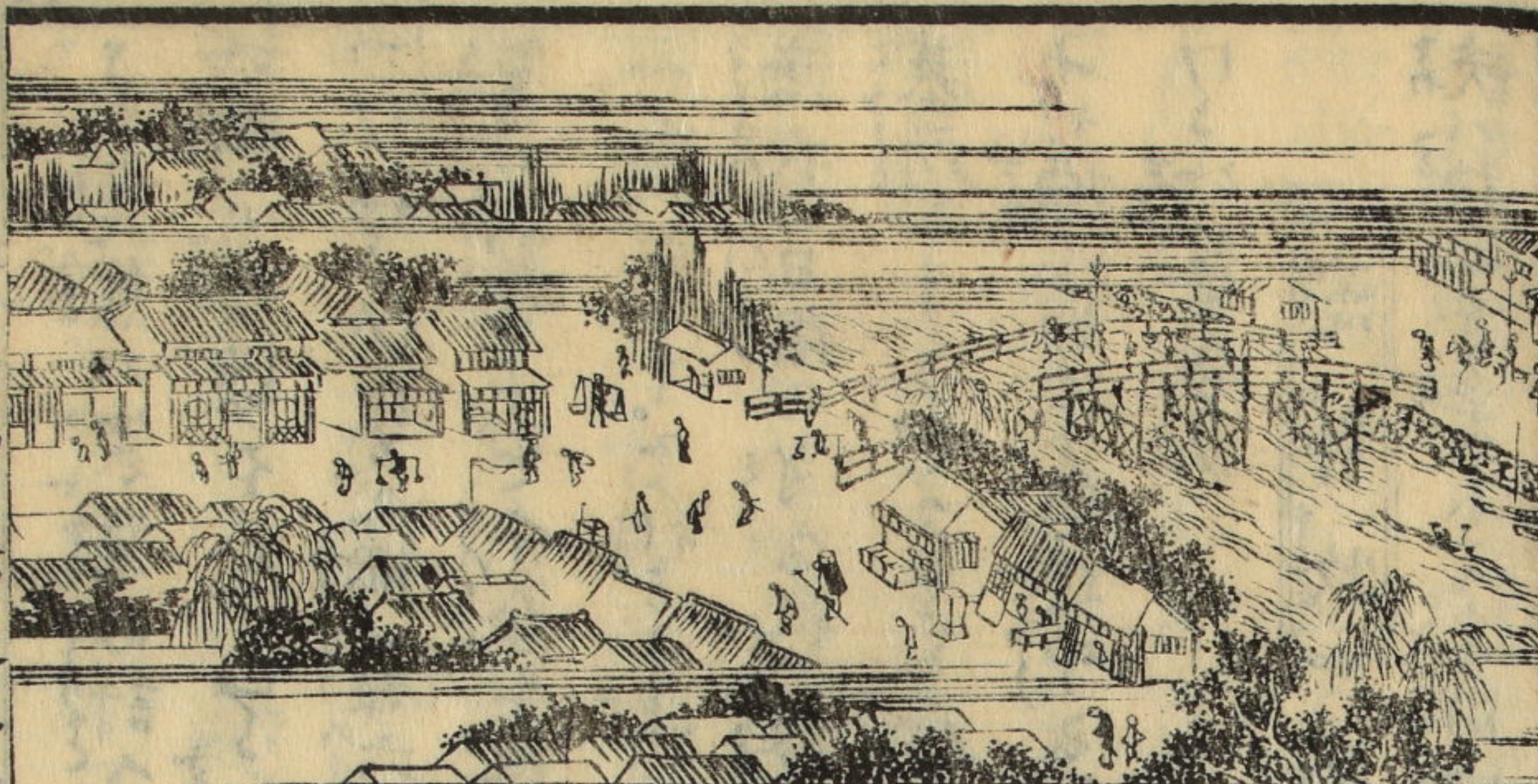
あがりく暗夜を照も。其光もふおれば。かと破損して片輪あこ車あり。
 折しも烈風どろくおろく。その見の翠簾をふさぐらおつこて見はし。
 金襴額瀧みお。紅の袴をきた。緑の黒髪をより乱し。太眉お
 かねらうる上臈。車のうちありけれ。藤六が妻をえけけ。色音はめ
 願そりたる顔をさし出。かきこれ声く。妻をえんより汝が子
 えよといふ。細手大お驚と。子の眠る所をえれば。びつ間の間あり失り。こ
 情をくおもふもあ。大路の方小子のあく声ささえされむ。このこ
 おさうくさもうら忘とく。又覗く。かの上臈さなはがしそ。汝が子へこめ
 あらどくしひつ。小児をさしはみさげくはし。細手悲とせんこさ。歌
 への鬼神の心をも和ぐれと。罪科へ我おとあれ。小車の中か。けね子さぐくも

罪科へ我おとあれ

小車の中か

と打歎こしけり。上臈呵くと笑ひ。歌の意はこゝろえなれど。妾今宵と
いふと食料をりこむ。いと餓されば。かへはしして。小児を志めらし。手足を
ほそくく折肉をひきり。くひひきりみぞ。耳のそふまで。さけられはのちり
血も流り。おそろしきも。おろろあり。綱手の此あり。さぬやえり。一声呀と
さけむつ。のけ不倒と。絶入り。さて物音お驚く。家内眠を醒し。あて
ぬ。ちた湯薬をさへ。介抱さるふより。絶。よ蘊生と。いとも。夫非命
死。多れ人ふ。子をさられ。かたある歎。心乱。狂氣。七日。と。昼
夜。わら。狂けり。つひ。小狂死。あぞ。死。たりけり。誠。衣の。衣。果あり。
片輪車の鬼よ。我子。か。せ。せ。と。い。ひ。狂。け。り。時。の。人。と。と
瓜。片輪車の鬼とも。一条。棧敷屋の鬼とも。い。ひ。く。お。そ。ろ。一。半。の。話。柄
あり。けり。と。う。也。是。も。又。實。内。芝。仙。が。蝦。蟄。の。妖。術。の。所。為。あり。あ。う。この

鬼神を役。洛中の人民をまやさせ。當今の不徳といふ。世と乱る
為ありとぞ。棧敷屋の鬼の事。宇治拾遺に見ゆ。娘唐衣が歎。か。り。尽。せ。う。も。あ。り。ど。や。と
自害をもとぶ。様子。あ。れ。を。人。く。お。り。さ。あ。ぐ。み。こ。ら。あ。ぐ。さ。り。て
中。野。辺。の。お。ら。り。を。さ。せ。け。る。が。素。日。陰。の。お。あ。れ。ば。世。に。い。ろ。り。道。れ
む。と。遠。け。と。も。此。家。の。あ。じ。の。菩。提。所。へ。葬。け。れ。それ。は。て。お。き。ま。さ
又。かの。陸。奥。外。の。濱。の。医。師。老。熊。の。か。の。地。を。出。奔。し。た。ら。小。京。都。小。邊。上。り
け。れ。元。来。藝。医。師。あ。れ。ば。辺。鄙。ぶ。ら。を。医。業。も。あ。ら。ん。良。医。お。ほ。と
都。あ。り。其。業。を。あ。と。り。あ。り。と。ぞ。あ。り。ひ。と。死。計。あ。り。け。り。然。つ。れ。お
近。頃。洛。中。小。變。化。あり。く。人。を。と。り。と。智。ある。盗。人。と。も。其。虚。よ。ま。じ
く。婦。女。を。奪。集。ひ。遠。く。賣。渡。し。く。お。の。代。を。む。と。や。り。け。り。が。これ。を。妖
怪。の。所。為。と。り。て。ま。み。ま。れ。ば。盗。人。と。も。い。ろ。り。時。を。得。ら。り。と。ま。じ。ひ。ぬ



外そとから
 のの医師いし
 老熊おほくま京きやうま
 迎むかひ上のり行ぎやう
 人ひと小こ身みを
 扮はなし
 藤ふじ六むつ娘むすめ
 唐たう衣いを
 ううぐぐひ
 ううぐぐひ
 ううぐぐひ
 ううぐぐひ



善知卷之三

三

さて老熊の家業の計ありき。つひにかの盗人の仲間に入高野山無名の橋下塔波女をおさし。行人おをを扮し。毎日洛中へ徘徊し。見ゆる女をつけ。ゆひひけり。偶藤六が娘唐衣をえつり。誠おしるるれ美人なるか。とを奪り。あるとぞ千金を得べし。尋常の女十人を奪んたり。かど一人を奪る。おまじとて。それより他の女お目なけり。唯かれをうぐんと。のこたみきり。唐衣の日陰のえられ。容易お出歩ふ。よ折もるりけり。ふこのご落母乃墓所おまう。とぞとぞ。度く出あり。老熊天のおへと喜ひ。癩病おのあせ。膝をかくひ。途中おおして。棄とふんと。ころりね。唐衣がえのえ危か。ける。次第あり。

荒野牧

第十條

夫ハ叔おと爰お入多田満仲の家臣。大宅左衛門光雅といふ者あり。武林文学に通じ。忠心無二の者あり。去る天慶年中。純友征伐の爲。惣大将小野好古朝臣おつと。六孫王經基王。尤馬助満仲公。西國おら。り。まひ。時光雅も箕田加藤等とも。おま。さ。の。行。り。豊前國茨取山の一戦。お拔駈し。軍令をそし。罪おより。主君満仲公の勳氣をう。りて。俄お浪く。の。外。と。あり。常陸國土浦お住。少く。の。を。を。以。て。田地を求。人お作ら。り。衣食の料。と。か。の。武藝軍学の指南。し。年月を。ら。り。年。齡。已。お。六。十。余。歳。お。ま。ひ。け。り。妻。ハ。前。お。お。り。唯。ひ。と。り。の。男。子。あり。名。を。光。國。と。し。ひ。今。年。二。十。三。歳。ま。あ。り。け。れ。お。ま。は。れ。れ。美。男。と。し。て。聰。明。伶。俐。人。お。越。諸。の。武。藝。お。通。じ。生。得。大。力。あ。り。千。斤。力。け。ら。れ。の。力。量。あり。ま。の。と。ま。と。風。流。文。雅。の。志。深。く。京。都。あ。あ。り。し。と。の。當。時。梨。壺。の。五。歌。仙。と。よ。ま。れ。其。一。人。博。学。の。不。下。れ。高。き。源。順。朝。臣。お。つ。と。詩。文。

和歌を学び頗るの道を得たり。かく多能なる若人あれども、かくとみ
 およびく。高祿をよめりかへんとり者あり。婿のぞむ者もよほしむ。
 二君ふつゝあれ志あり。富貴をりしむる心もあき。唯父と同居し、辺鄙に
 うづめれく。いさづみ光陰をもちりけり。叔光雅の本國、近江の國あり。
 志賀の里に先祖の墓所あり。今年高祖父の百集忌あり。終
 りとも。光雅の老衰しく遠路の旅行あり。光國をばりしむ。
 祭ちちんととと。これみりしむ。光國、俄に旅装をとり、從者をも具せしむ。
 唯ひとり發足し、近江の國へつと。先祖の墓へつと。りん頃
 祭ありあり。京都に伯母あり。いさしく音信あせられ、ついでに
 都へのほう。安否をとりやと。名もあき。志賀の山越の難所あり。は
 かりぬ。案内あり。山路あり。入み、夕霧降くならせり。東西より

よがく。志もあき。手もつれ。徑路おぼしき。人家もあき。道行人もあ
 り。道をとる。之も便もあき。唯足のむくみ、さうせり。なごり、さほほに
 山はく。迷行。ついに日暮り。峰の猿の悲しく。つらび谷の水音
 こそ、ゆき。ひびく。瓜すつ。いとあやうげなれ。池をつと。苔あり。たれ。岩
 橋を渡り。あどし。險阻の道をゆき。頃日降つた。雨の後のあられ。
 泥水高く。糸あり。道ぬりて。歩む。頭の上におおひか。なる。梢
 り。山蛭おらかり。襟のうらふり。岩群のひき。りも。ひ。生。腔中の
 うらふ。いり。鮮血あせり。流し。痛堪が。凡蛭の根の糞中。り
 生。根多。山あり。か。野あり。此。此。あ。さ。か。の。獄。お。不
 かんと。お。ひ。も。さ。は。れ。不。背後の方。狼の。お。る。色。た。す。ふ。お。く。ま。こ
 せ。く。け。あ。み。く。の。者。あ。ら。打。お。へ。り。ど。か。強。く。膽。か。た。男。あ。れ。ば

少しもおちくけりしむ。唯るふのこづらひ。又志むく行くむく
 すれば。沸たる谷川あり。水勢をげく流とあらね。別よむく道
 りみけきせんまき。木の枝をうりて杖と。水の浅深をうりて
 ふ。こまぐ深くもおやえづれ。裾をかびく水中におりたり。幸しく
 いろふの岸におり。月の光りふや。背後を顧と。數十の蛇かま首
 をたててつらあり。川を渡りてこまへは。光國これをつらあり
 けら。よくなり。頃日のまが雨。水勢たけありしを。おされて渡り
 かみ。居る蛇も人の渡りをつら。中水勢のよりたれ。暁。かく
 一度小渡りつらあり。一寸の虫も五分の魂あり。と。常言ふあり。ま
 小輩と。いふこれむ。の智あり。人とし。智あり。虫もやね。と。感歎
 へ。又志むく。いさ。頻小飢。のぞみ。殊更業。内。険道。と。地。あり。

その針鉄石。おあづれば。股きりれ。足も。なぐ。ひ。は。あ。う。の。流。川
 樹。く。咽。を。う。り。松。根。お。尻。く。けて。き。む。一。中。を。ひ。四。方。を。う。り。あ。ひ。け。

お。此。時。月。の。雨。笠。を。ま。て。不。の。う。う。友。お。あ。れ。う。れ。孤。雁。天。ふ。つ。た。て。

峯。の。紅葉。の。深。う。け。た。う。ふ。雲。霧。を。お。び。く。紅。の。帳。を。お。さ。た。る。が。あ。う。く。

秋。の。千。草。の。高。く。生。た。う。ふ。流。流。く。お。こ。乱。と。く。白。波。の。岩。を。あ。う。風。情。

あり。妻。衣。康。の。き。いと。か。と。う。ふ。こ。こ。う。ひ。ま。く。ふ。鳴。泉。の。声。れ。う。れ。く。あ。

いろく。お。あ。た。つ。て。虫。の。音。の。わ。を。中。な。れ。と。ぶ。く。も。の。さ。や。く。意。

あり。こ。こ。ね。ふ。秋。と。悲。こ。こ。ひ。な。う。ふ。独。旅。の。か。く。お。ち。の。あ。た。山。中。に。

だ。と。れ。あ。れ。が。膽。氣。烈。し。と。若。人。あ。れ。ど。も。あ。う。り。お。愁。を。催。し。よ。く。く。あ。

了。こ。顧。と。ば。此。所。の。基。原。も。山。の。さ。づ。れ。の。草。ひ。ふ。あ。び。う。る。教。の。

志。し。の。石。お。ち。の。藪。あ。う。づ。り。た。う。う。ふ。お。ち。人。あ。う。も。う。く。な。あ。り。

光國歎息。老くる若く。愛せる。悪める。賢れた。愚ありを。かき。た。つ。お
 越く者。いく人ぞや。人の塚とあれども。塚又人を生ぜども。ひとりごつと
 ころ。よ。無常と。觀ド。けれ。折し。も。尾花の。ち。びり。たる。所。や。く。と。あり
 け。ま。ど。この。根。あ。どの。い。で。ま。う。う。と。松。蔭。あ。身。と。と。ば。め。く。う。か。ひ。う。れ。よ
 ころ。あ。く。く。人。あり。月。影。あ。ま。か。い。え。れ。い。三。輪。く。み。く。れ。老。女。白。髪。と。乱。く
 老。く。松。ふ。松。蘿。の。の。く。と。る。中。う。あ。る。が。あ。の。禮。漆。の。と。さ。衣。を。着。く。總
 の。た。ま。を。を。り。け。鐵。爪。か。び。く。つ。と。出。り。り。の。れ。夜。中。小。何。さ。る。か。ん。と。あ。不
 う。か。ひ。居。る。る。老。女。た。つ。み。く。れ。腰。と。の。ぶ。く。あ。う。り。瓜。え。ま。か。い。時。も。夜。風
 と。び。て。木。の。葉。の。こ。ろ。く。と。散。ち。れ。う。ち。を。か。あ。こ。こ。り。と。ゆ。れ。め。ぐ。て
 ち。が。て。一。つ。の。新。塚。を。掘。入。一。指。桶。瓜。あ。ぶ。と。さ。り。亡。者。を。引。い。と。と。見。と。と。ぞ。
 あ。ま。よ。く。し。さ。女。の。死。骸。あり。光。國。益。怪。く。す。た。ん。れ。も。せ。と。入。居。る。ふ。中。く

懐より。剥。刀。と。とり。や。か。の。死。骸。の。黒。髪。を。剥。お。し。経。帷。子。を。と。り。く
 くれ。を。包。こ。あ。不。桶。の。底。瓜。探。り。く。り。出。と。物。遠。目。あ。ら。さ。う。ふ。又。く。移。と
 月。か。げ。み。か。が。た。あ。ひ。く。と。ま。う。く。と。光。を。を。え。れ。一。定。鏡。あ。は。し。さ。く。と
 等。の。物。を。み。る。懐。み。お。と。め。死。骸。と。り。の。お。と。く。小。埋。め。鐵。を。か。び。く。と。ま。の
 薄。原。の。う。ち。ふ。か。ら。れ。入。り。ぬ。光。國。始。終。と。え。く。と。ひ。け。れ。ハ。扱。も。不。敵。あ。ら
 老。女。な。推。中。の。遺。賤。を。棄。ふ。の。こ。あ。ら。ん。亡。者。の。髪。を。剃。く。れ。ハ。假。髪。お
 賣。爲。る。ふ。し。せ。あ。ら。さ。う。の。悪。業。を。な。ま。と。奴。も。あ。れ。る。あ。ま。り。と。や。借
 と。あ。ら。ぬ。奴。ま。と。ひ。り。と。ら。く。と。あ。ら。く。や。と。ら。ひ。け。ら。小。風。お。つ。れ。と。こ
 ゆ。れ。鐘。と。か。ぞ。あ。れ。ば。と。子。の。刻。あり。か。く。く。ハ。夜。通。一。小。京。ふ。い。と。ん。と
 と。く。も。か。ら。あ。ら。く。と。幸。ら。う。た。あ。ら。り。小。寺。あり。と。お。不。ゆ。れ。ハ。尋。行。一。宿
 を。こ。ら。や。と。鐘。の。こ。と。ゆ。れ。方。と。心。あ。て。小。走。行。け。ら。小。果。く。松。枚。茂。く



おんや
大宅の太郎光國
旅中ふかのく新塚
そのづく賊邊瓜そ
あーむ

善知卷之三

善知卷之三

十九

さらば光國とよとよ打卧。そと野たて熟睡の体をあそ。まじあり
 と。まじあり砥みくりの研音ひびたれあはゆへ。やとよまのひきまを
 のぞきとるれば。婆くあつみたれ片肌を脱平廣菜刀を研体なり。
 果しく彼奴大賊あり。我寝首をかんとくうれあらん。枯木の如く
 老朽なぐり貪欲大膽の老女あとおひひつ。なや息をのこてうか
 ひ居られ折しも。門の戸をわとくとらなく音と。婆くこれをすけひ
 と立出。深夜ふもまは誰あぞとらふ。外のこの人たれ老熊也。
 先くあけくよとらふ。婆く戸をまづらあけく。対の方あ出。何
 うやく様子も。光國窓のひきまより外のかとみえれば眼じあはく
 胸もあぶ。ツノてん大去師。白布あく頭を巻。白行衣めたれ
 りのを着く。手桶のうらみ鉄の齒の足駄といれく提く。まは行人

の体あり。そのあとお立され。と食とおぐ。頭の毛も眉毛もあく。
 面の皮破と鼻腐ちら。口のわりの肉爛く黄くみうた齒のあはく。こ
 とれさぬ。癩病やみとく。とね。此者ひとり。の女と小眼あく抱く。と
 えれば。色よれ衣を着たれ。手弱女あく。口小猿嚙とめられ。腕ハ荒
 縄をりくらしあげられ。ま。恰も屠家あつたれ。まの羊のこ
 なり。折しも雨雲くれく月の光あつた。あはこまふえ。癩
 病の膿水。かの女の玉の中うたれ。顔のうみ。やとくと落のま。く。目も
 まのびが。さ。さ。何ご。と。耳とをば。さ。かの行人が
 いとく。か。ま。み。語り。お。美。今。夜。首。尾。く。査。ひ
 ころね。今夜一夜あづり。られ。幸丹後の國の人買ふ約。お。た。れ。し
 聖ハ千金。なる。代物あり。なんら。み。も。一夜の宿錢。と。お。り。く。報。ゆ。さ。し



光國みつくにかりかりひひううのの賊ぞく婆ばの
 家いややざざりり婆ばととここららしして
 藤ふじ六むつのの娘むすめ唐から衣ぎがが危あや難しな
 そそくくふ

善知卷之三十一

足を飛せり。一ッ踢たりけし。老熊背後の方へころくと轉く。古井のらへ
すつとさうさうふそ落ちりけし。此時婆い中へ起上り。あやうりごまふ。庵
丁をさう手ふらりつとめをまねを光國棄取たれかの鋤をさうり。さ
腰びぢまぐり。地上小嘯と打倒し。足下ふあうとふす入て。刀の柄みまを
ウケう。さうさうさう。我先祖の遠忌を祭る爲旅行し。人を害さとも
違ふ。なまきべさう香と心なめさひ。いさくさくも一人殺したり。
かれ賊どもを殺ハツリと人の為ありと心を決し。又柄ふまをさうけし。
かゝる奴原を殺ふ。武士の刀をりらゆへハ搦ありとおひつ。あやうり
ふす。傍み立ちられ石佛の地藏菩薩をえつけ。よしく。汝此は
仏不願。せめく悪趣の苦患をすねか。とよと戯れつ。かの石佛を抱き
頭をのぞみて。ひとけさつたけし。快し哉。賊婆。目は白昇より血を

牛一頭微塵小碎く死さうり。此もさう老熊ハ古井のらへころとさうい
濡鼠のぐりぐりて。逃出を光國えつけ。彼一人生おくも残念なり。
とく追ひんとせし。柴小屋より。女をさうり。あやうり。さうり。さうり。
かきをやむらん。女を救んとたゆらうら。とや老熊ハ遠く逃のびえ
打さす。柴小屋のらり。女のうへ繩をさう。抱く内ふ扶入。息もな
あれば。たくりの醒薬などあつて。今抱きお。女中へ正氣つ。目次
ひ。さう。光國をさうり。さうりの法か。あう。さう。さう。さう。さう。
あう。さう。恩の深う。とさう。顔を光國つ。さう。さう。さう。さう。さう。
殿の息女あ。あ。さう。とさう。唐衣も光國を打さうり。さうのさう。大宅
光國のさう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。
光國も唐衣。此所へ捕られ。あう。委細をさう。唐衣涙をさう。

おととく。志どしゆふど。中うく涙をのこひ。妾が薄命をすくたぐよとく
 近くより。父藤六主君頼信を諫て手打小成しとを始りて。家をつれ
 出く一条棧敷屋ふかれは覺化の爲小身とれ小児をとられ母舌懐て
 育まり。おのれ行人の爲小棄れく。此所へ身りしすての始末のあふり
 語りしゆ。光國益驚き。某今夜此山中をこもも。京都小いりり。心身等
 の安否をとらん爲むりかり。さあふ山事のおんと露むりもおりはり
 ねとく。悲涙小袖を志わりまり。藤六が妻細手へ。大宅の光雅が妹あく。
 光國が爲お伯母あれはふく悲しむ理あり。叔先証の騒動小踏散し
 たら雜具のうらふ麻苧ひがぐり。ららりちいさ鏡のすらびりてあ
 ちるを。唐衣偶えつりて取あげらるをかくとよとくえとり。あるいぢ。
 此鏡と祖母のかたきありとく。母人幸むじく持傳へ家をのれせらじ

時まぐも。肌瓜とまうね鏡かれば。若心残りやせん。棺桶のうらふ入て
 葬はる。何とくくさあれとくしひつ。又經帷子と黒髪をえつは
 この母人不着さかきせし。死出の旅衣あく。此袖もあるせし。とらり母人
 の戒名あり。是等のおのうらあれはくもいふしとよと吐息しけ
 り。光國これを打笑。さても不思議の事よとく。先刻途中あくかの賊
 婆が新塚をあむたしをえとれとをかりけむ。唐衣とれとを母の
 塚ふれ常く髪おみ志むひり念その終小葬しがとてこれと母人の
 髪のもくとしひく。又今更の中ふかき。涙おひせびぐれが。此鏡ぬくひ
 妾がふりしひ。長きかたきせよとく。母人のふへりあふりあふり。此
 黒髪も假髪とる。常ふかきらふひりれ。共ふかきとあふりあふりし
 とく。經帷子ととも小懐おさめられ。光國いこく。さてもあふりあふり。



二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

